

コスモス 6月号

第70巻 第6号

◆宮柁ニカレンダー(39) 六月の歌

枇杷剥けば汁つゆしたたるを床の上まなこゆはな放たず
父ちちが待つまちつなり
歌集『多く夜の歌』

枇杷を剥く。こまかな産毛の薄皮を剥けば朱を帯びた黄色い果肉が覗き、トパーズ色の果汁がしたたる。病床からそれを見あげて待つ父。その眼差しは食べることへのひたむきさ、すなわち、衰えた体に最後に残った生命欲をありありと示している。昭和三十四年「短歌」八月号「半歳抄」五十首より。

柁二の枇杷といえは「すたれたる体横たへ枇杷の木の古き落葉のごときかなしみ」(『正忘瓦亭の歌』)が思い浮かぶ。壮年期の表題歌と晩年の落葉の歌は、遠くも密かに響き合っている。(小田部雅子)